

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連
213
載

人類と病

相変わらず、日本の死因第一位は「がん」。死亡全体の28%を占めている。

早期発見の手段や治療の効果が功をなして、がんが死に直結する病気ではないことはすでに周知の事実である。一方で、がんは細胞の老化といいつつ、近年ではAYA世代（アヤ世代）といつて、若い人のがんも注目を集めている。

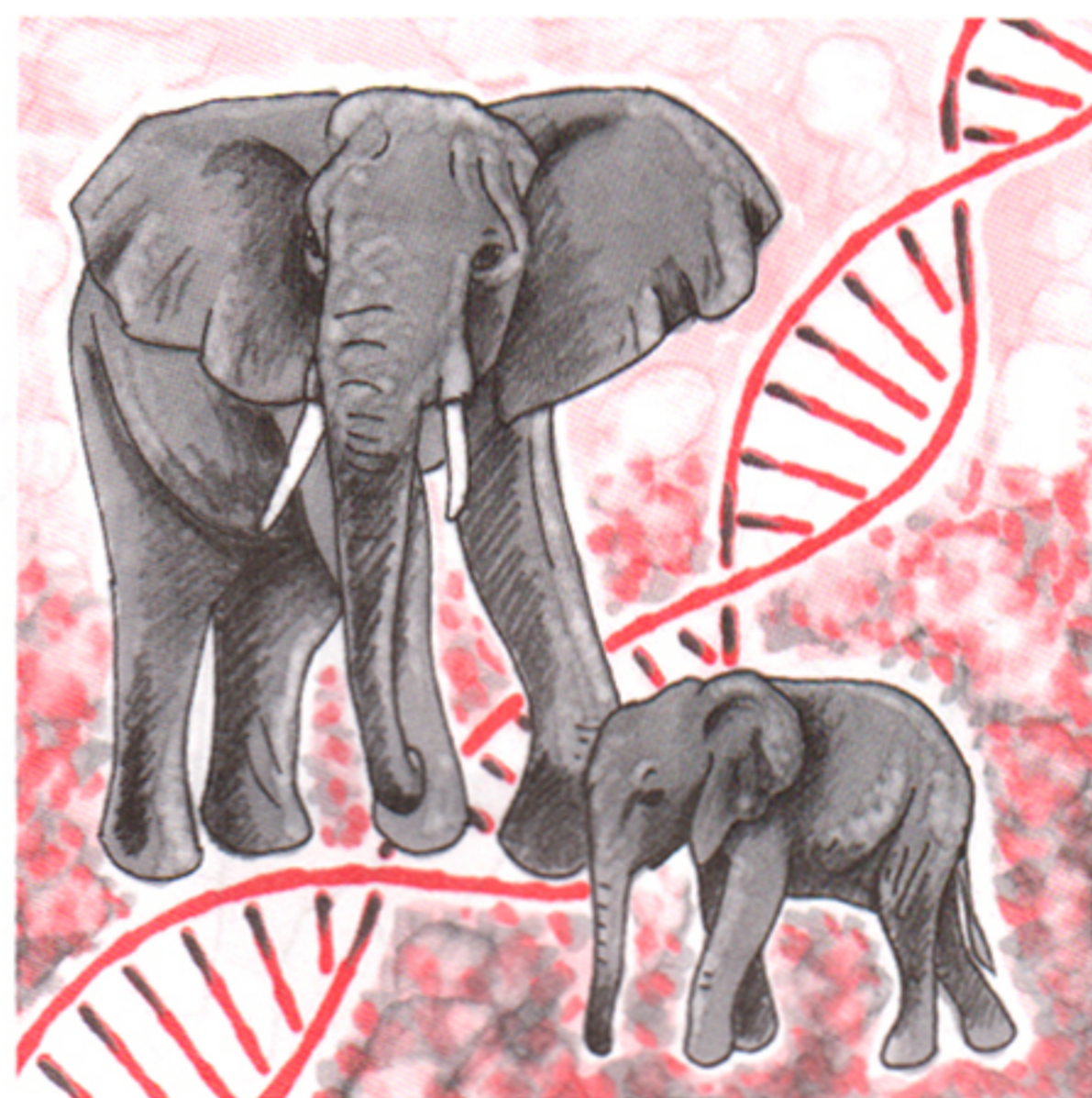
AYAというのは、Adolescent and Young Adult

の頭文字を取ったもので、思春期及び若年成人と訳される。年齢でいえば15〜39歳あたりだろうか。その世代の多くが病気とは無関係に過ごしている一方で、が

とされる。母親のおなかの中にいる、まだ胎児のときに、色々な細胞に分化する能力を持つ原始胚細胞という細胞が悪性腫瘍になったものだという。

あり、遠隔転移があっても完治が可能ながんのため、それほど深刻さはないにしろ、やはりがんには違いなく、診断された方はさぞ戸惑うことだろう。

あるが、アフリカゾウには遠く及ばない。両生類のイモリもがんになった形跡がない。イモリは四肢が切断されてもその後生えてくる。これは人間にはない相当高い再生能力であり、イモリにがんがないのもその点と関連があるらしい。何ともうらやましい話である。



皆が皆完全な姿態で登場するわけではない。体の一部の器官が未熟のまま生を受けることだって十分にあり得る。成長のスピードは決して一律ではないのだということを改めて知る。

幸いにも、胚細胞腫瘍は希少がん（まれながん）で

昭和のはじめ、抗菌薬が発明されたとき、これで感染症は克服できると考えた。また、遺伝情報の解析に成功した際には、世界中の人々ががんや生活習慣病の解明や治療は格段に進むと信じられた。しかし、そうではなかったことにすでに皆気づいている。

イラスト・伊藤香澄